

沖縄の草装神と仮面神

大城 學

(沖縄県立博物館)

The Disguised gods and the *Kamen-shin*, masked man as god, of Okinawa

Manabu OSHIRO

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

祭りの中心には、いつも「神」がいる。その神は、形態的に2つに分けられる。すなわち、具体的な姿で出現する場合（実在するもの、目に見えるもの）と、神女たちの祭儀や神歌をとおして神の出現が表現され、具体的な姿を見せない場合がある。前者は、「草装」や「仮面」の仮装神である。後者には、たとえば沖縄諸島のウンガミの神、宮古島のシナフカ神、石垣市川平のニランタ神などがある。これらの神は、祭りの日に海上遙か彼方・ニライカナイ（＝常世国）から来訪するといわれている。私たちは各地の祭りや芸能で、実にさまざまな草装や仮面の神をみている。

人が神に扮するとき、特定の植物で体を覆ったり、頭につけたり、あるいは頭巾をつけたり、笠を被ったりする、いわゆる草装をもって表現することがある。いにしへから、特定の植物には神靈がやどるという信仰があり、その植物を身につければおのずから神靈が人体にのり移る（＝依り憑く）と考えられてきたのである。また、顔に特殊な塗料をつけただけで（＝化粧をすること）、仮装を意味する習俗も古くからあった。

一方、仮面による神の具象化も古くから盛んに行われていた。人びとはいにしへから今日まで、草装や仮面に対して宗教的な意識や感情（＝神観念）をもっていたのである。

本稿では、沖縄県内のいくつかの草装や仮面の「仮装神」の事例をいくつか紹介し、そ

の芸能史的あるいは宗教的意義について考察してみたい。県内の草装神や仮面神が登場する祭りの内容が、ムラの成員以外には厳格に秘密にされているものがあり、秘儀的な祭りとして行われているものがある。そのような祭りと神については、本稿では取りあげないことにした。

I. 草 装 神

祭りに、神女がシルジン（白衣）と称する白麻の打ち掛けを羽織り、頭に白布を巻いたり、あるいは蔓や葛を巻いて作ったガソシナと称する被り物を頭につける。あるいは、白鉢巻に作り花（挿頭の花）をかざす。そして、たとえば大宜味村字塩屋のウンジャミでは神女たちは神アシャギ近くの小川で、清水を各自の額に3回撫でることをする。これは自ら神の資格を身につけて神に変身する（人から神に生まれ変わること）儀礼である。私たちは、このような神女の神格化の行為をよくみている。

ここでは、神女以外の草装神として、①国頭村字安田のシヌグのシヌグ神、②本部町字伊野波のシニグイのムックジャ、③石垣市字川平の節祭のマユンガナシィの3事例を取りあげてみる。

1. 安田のシヌグのシヌグ神

国頭村字安田のシヌグは、旧暦7月初亥の日に行われる。シヌグ（ウフシヌグ）とウンジャミ（シヌグングヮー）を、毎年交互に行う。

神女たちは、当日の午前9時ごろからアサギンシリ、ニードゥクル、ナハメー、アナガー（井泉）、神アサギの拝所で祈願をする。神女たちの拝所での祈願は、午前中で終わる。一方、山登りをする5歳から50歳までの男たちは、藁帯や藁鉢巻を用意する。お昼、男たちは各家でシヌグジューシ（雑炊）を食してから、ヤマヌブイ（山登り）をする。山はメーバ、ササ、ヤマナスと3つあり、門中ごとに分かれて行く。

山で男たちは、前日に用意した木の枝葉、蔓草を身にまとい、頭に巻いた藁鉢巻にはミーハンチャー（和名：ゴンズイ）の枝葉を挿す。そして、手に木の枝葉を持つ。メーバの場合、身支度を済ませた男たちは、全員一列に並ぶ。最初、山に向かって合掌し、次に海に向かって合掌する。大太鼓の合図で円陣をつくり、全員で「エーへーホー」と掛け声をかけながら、左廻りにまわる。1回廻るごとに大太鼓の連打を合図に「スクナーレー」といいながら、各々手に持っている木の枝葉で激しく地面を叩く。この所作を3回繰り返す。以上で山での儀礼は終わり、草装神に変身した男たちは、メーバからの太鼓の合図で、それぞれの山から「エーへーホー」の掛け声をかけながら下山する。下山の際は、大

太鼓を持っている者が先頭になる。

メーバの男たちとヤマナスの男たちは、安田橋で合流する。このとき、婦人たちが手に手にお酒を持って、下山した男神たちを迎える。これを「サカンケー（酒迎え）」といつて、婦人たちが男たちに酒を飲ませる。はじめて山に登る（ハチヌブイ「初登り」という）男児は、酒を指先で額につけてもらう。サカンケーをすまると、メーバとヤマナスの男たちは、アダンスナー（アダントゥンチバタキともいう）に行く。ここでササの男たちと合流する。アダンスナーには婦女子たちがいる。下山した男神たちは、彼女たちを囲み、左廻りにまわりながら「スクナーレー」の掛け声に合わせ、手に持っている木の枝葉で婦女子を叩く。この所作を3回繰り返す。

次に、アサギナー（神アサギの前の庭。広場）へ行く。アナガー（井泉）の前に敷いたむしろの上に、神女たちがすわっている。男神たちは神女を囲んで、「スクナーレー」の掛け声に合わせ、手に持っている木の枝葉で神女を軽く叩く。この所作を3回繰り返す。

そして、集落内を通って浜辺へ行く。道中、広場や木陰に老人たちがいる。草装神は、その人たちを囲んで「スクナーレー」と声を掛けながら、木の枝葉で軽く叩く。また、病弱な人や歩行困難な人の場合は、その人の家の屋敷囲いの石垣を木の枝葉で叩いたり、座敷内を木の枝葉で叩いたりする。

集落内を祓うと、全員海浜に行く。横一列に並んではじめに山に向かって合掌し、次に海に向かって合掌する。大太鼓の合図で全員海に入り、身にまとっていた木の枝葉、蔓草、頭に巻いた藁鉢巻とミーハンチャーの枝葉、そして手に木の枝葉を解いて、海に捨てる。再び、大太鼓の合図で浜に上がり、大太鼓を先頭にしてアサギナーへ行く。

アサギナーに着くと、今度はナハメーに立ててある旗頭を先頭に、三線、大太鼓、男たちと続いてウイスカ（上の川）に行く。男たちは川に入り、水浴びをする。水浴びが終わると上がってきて、川辺で三線に合わせてカチャーシーを踊り、踊りながらアサギナーへ行く。そこで、婦女子も合流して賑やかにカチャーシーを踊る。カチャーシーが終わると、全員いったん帰宅する。

夕方、神女たちがアサギンシリ、ニードゥクル、ナハメー、アナガー（井泉）、神アサギの拝所で祈願をする。男たちはアシャギナーに大きな輪をつくってすわり、思い思いに酒を酌み交わしている。これから芸能が3題演じられる。はじめに「ターンクサトゥエー（田草取り）」を、青年男女10数人で演じる。芭蕉着を着て藁帯をしめ、藁鉢巻、藁タスキ。藁数本を膝頭の上部に巻き付ける。4列縦隊になり（6列のときもある）、上体を前に倒し、三線に合わせて前進しながら田草取りの所作を演じる。三線といっしょに数人の年輩者が出て囃子たてる。また、ヒンメームチ（弁当持ち）がマーグ（籠）を背負って出る。約数分の演技である。そのときの歌詞は次のとおりである。

<歌 詞>

1. たんくさ とういばる
 ひんめ くわすんど ヘイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ
 なーひん とういばる
 ひんめ くわすんど ヘイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ

2. あさぎまぬ あくたヨ ホイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ
 たが しねく なちえさヨ ホイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ
 わした みやらびぬヨ ホイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ
 しねく マタ なちえさヨ ホイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ

<逐語訳>

田圃の草を取ったら
 弁当を食べさせるよ ヘイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ
 もっと取ったら
 弁当を食べさせるよ ヘイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ
 アサギ庭の塵芥を ホイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ
 誰がきれいにしたか ホイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ
 私たち女童が ホイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ
 きれいに マタ したよ ホイ
 ヨホイ ヨイササ スリスリ

次に、<ヤーハリコー>の演技。山から木を切り出し、造船して、その進水式のさまを演じているのだという。3m程の丸太に、1mの手縄を4本結びつける。その手縄を10数人の青年男子が両方から持って、「ヤーハリコー、ヤーハリコー」を掛け声をかけながら、神アシャゲの屋根にぶつける。この所作を3回繰り返す。桶を持って丸太に水をかける所作をする婦人が2人いる。約10分の演技である。おしまいに、婦人による<ウステーク>が踊られる。円陣舞踊で、入り羽の歌・うちすま節・恩納節・あがまく・まはま節・かしら節・かんぜーく節・海のささ草・はりばこーぬ・散山節・浦々・引き羽の歌・高離り節、以上13曲を鼓に合わせて歌いながら踊る。ウステークがはじまるころは、陽も暮れ、松明のかがりで踊る。これで、シヌグの儀礼は終わる。

さて、山でムラの男たちが、木の枝葉、蔓草等を身につけて草装神に扮するのは、安田以外では、国頭村字安波・奥でもみることができる。この草装神は<シヌグ神>と称されている。草装神・シヌグ神が集落内の悪霊や災厄を海（厳密にはニライ・カナイ）へ追い祓う、というのがシヌグの目的のひとつである。<祓う>という行為は、祓った後に健康幸せ等を招きよせることを意味している。だから、ムラ人にとってみれば、シヌグ神が登場して祓ってもらわないと、心情的に向こう1年間の健康が不安であるということになる。

シヌグでは、害虫祓や虫流しも行われている。『琉球国由来記』(1713年)に、シヌグについて次のように記されている。

①七月、日撰ヲ以、シノゴ折目トテ、御タカベ仕ル。様子ハ、色々作物ノ品品ニ、虫

不付タメノ願ニ、高一石ニ付、雑石ニ合完取合、御花・御五水・仙香ニ仕替シ、城ノ頂ノ御イベ、同所伊江セイノ御イベ、荒ノ浜御イベ・根神火神へ居テ、ノロ・捷神、御タカベ仕リ、万ズノ虫取集、海ニ捨テ、島中男女惣様、一日遊申。昔ヨリ伝来テ仕ル也。

(卷十六、伊江島〔年中祭祀〕)

② シノゴオリメノ事

(七月、島中ニテ日撰仕申。遊一日ノ事)

右、アクマハライトテ、男童十人程、アマミ壱人、衣袴袴着テ、白サジ、シレタレ結ビシテ、手々ニ、棒ツキ、アマミ人、並、其日ノ、年ナフリノ人、弓矢持、先立仕、

オナジヤライハウ、エイヤイハウ

ト唱テ、家々ニ入り、又島ノニシ崎マデ行テ、ネズミヲ取り、年ナフリ持タル、矢ノサキアテ、海ニ入レ捨テ、村ニ帰リ、一所ニ寄合、神酒持寄、祝申也。

(卷十六、伊平屋島〔年中祭祀〕)

『琉球国由来記』によると、シヌグは、いろいろな農作物に虫がつかないように祈願し、あらゆる虫を取り集めて海に捨てたり（伊江島の項）、また、男童10人程とアマミ人が手に手に棒を持ち、年ナフリ人（男性神職者か）が弓矢を持って唱え言をいいながら家に入り、島の崎まで行ってネズミを捕り、それを海に流す（伊平屋島の項）とある。このように、シヌグには＜祓う＞儀礼がある。そして、祓う行為はムラの男が扮する草装神・シヌグ神によって行われている。シヌグが行われるころに、ウンジャミも行われる。ウンジャミにも祓う儀礼がある。ウンジャミを「ヰナグウイミー（女の折目）」というのに対して、シヌグは「ヰキーウイミー（男の折目）」と称している。これは、シヌグが男主体の祭りであるからで、その男が草装神・シヌグ神となって主役を演じるのである。

2. 伊野波のシニグイのムックジャ

本部町字伊野波では、旧暦7月20日から26日までの7日間にわたってシニグイが行われる（他の地域ではシヌグといいう）。6日に草装の来訪神くムックジャ>が登場する。7日間の祭りの日程は次のとおりである。

旧暦7月20日・22日……マーグミ。ユークイ（世乞い）ともいう。ユー（世）は豊穰・富貴・健康・幸せなどを意味することば。この日はく神迎え>の日である。

22日……ヤーハリホー。ウプユミ（大折目）ともいう。豊漁祈願。

23日……ナーグヤサグイ。豊穰祈願。

24日……ハンラレート。悪霊や災厄祓い。

25日……シニグイ。豊穰祈願。婦人がウシデークを踊り、来訪神・ムックジャが登場する。

26日……ワカリ。神女の慰労。

25日の朝、各家から米を1～2合ずつ出し合い、それを区事務所で集める。その米で神酒とお握りをつくる。神酒は午前中につくる。午後から婦人2～3人が、ノロ殿内の前に臨時にかまどを設け、鍋を用意して御飯を炊く。米に粟をませた御飯である。御飯が炊けると、それでお握りをつくる。はじめに、夕方出現するムックジャの分として3個握ってノロ殿内に献饌する。神酒も供えて神女が祈願する。その間、婦人たちちはお握りをたくさんつくる。神女たちの祈願が終わると、はじめに神女が神酒をいただき、次にお握りを食する。続いて婦人たちも神酒をいただき、お握りを食する。しばらくすると、子どもたちがノロ殿内に集まり、お握りをもらって食べる。後で、婦人や子どもたちが各家にお握りを配る。

日没後、神アサギの前庭に、紺地の琉球絣を着た婦人が集まって、ウシデークを踊る。踊り終えると、区事務所の女子職員が、ウシデークを踊った婦人たちに呼びかけて、ムックジャを演じる者を募る。2人の婦人が選ばれる（女ムックジャ）。2人は女子職員からタオルを受け取り、頬被りをして神女といっしょにノロ殿内へ行き、祈願をする。しばらくして、2人は再びウシデークの輪に戻る。すると、鼓を打ち鳴らしながらウシデークを踊っていた婦人たちは、神アサギ前庭から50m程離れた区事務所前広場に移動する。区事務所前広場は、かつて神アサギがあったところで、広場一帯はアサギマー（アサギ庭）と呼ばれていた。そこで女ムックジャも参加して、ウシデークを踊る。

婦人たちがウシデークを踊っている間に、区事務所では男ムックジャに扮する青年男子2人が、芭蕉布の着物を着て藁帯をしめ、タオルで頬被りをし、ゴム草履を履いて身支度をしている。ウシデークが終わると婦人たちは、神アサギ前広場へ行く。男ムックジャも三線、太鼓、ドラの演唱で神アサギ前広場へ行く。男ムックジャは広場を横切って、ノロ殿内に行く。

男ムックジャは、ノロ殿内で神女から神酒とお握りをいただく。そのとき、男ムックジャと神女が問答を交わす。これを＜ユングトゥ（誦み言）＞という。神女と男ムックジャが問答を交わし、お握りを食している間、ウシデークを踊っていた婦人やムラ人は神アサギ前でくつろいでいて、飲物が配られる。女ムックジャは、頬被りを解いている。しばらくして、男ムックジャはノロ殿内から出て、他のムラ人と同じように区事務所の職員から飲物をもらう。これでウシデークとムックジャの儀礼は終わる。なお、ユングトゥの詞章は、次のとおりである。

<唱え>

ムックジャ：ゆしりやびら
 神 女：まーからちゃーが
 ムックジャ：わした とうじみーとう
 しまぬうさかい にがてい
 くんじゃんぬ さちから
 ゆしりやびたん
 ゆんぐとう しみてい
 うたびみそーり
 神 女：くりや
 びるましむぬさみ
 とーとー
 うたてい ちかし
 ムックジャ：むぎ あわ とーぬきび
 ちくらわ
 ふーぬたるか
 んちゃまっくわ かきらち
 うたびみそーれ
 めー ちくらわ
 まんさくゆからち
 あぶしまくら かきらち
 うたびみそーれ
 んむぬ いるかじ
 ちくらわ
 うしぬ ちぬぬぐとう
 ながく まぎく さがい
 うんぶい でいきらち
 うたびみそーれ
 なしむぬくわー うはんじょーや
 いきが いなぐ
 うちまじり まじり
 ちゅみーとうから
 じゅーににん

<逐語訳>

やって来ました
 どこから来たのか
 私たち夫婦は
 島（ムラ）の繁栄を願って
 国頭の先から
 やって来ました
 ユングトゥを唱えさせて
 ください
 これは
 珍しいものであるよ
 では
 歌って聞かせてくれ
 麦、粟、唐の黍を作れば
 穂が垂れる程
 土を枕にする程稔らせて
 ください
 稲を作ると
 満作に稔らせて
 畦を枕にする程稔らせて
 ください
 甘譜の数かず
 作ると
 牛の角のように
 長く太く下がって
 垂れるほど稔らせて
 ください
 子の繁昌は
 男女
 打ち交じり交じり
 一夫婦から
 12人

	していらち	誕生させて
	うたびみそーれ	ください
神	女：あんせー やーや	それではあなたは
	なしむぬくわーや	子どもは
	いくたいが	幾人いるのか
	ムックジャ：うとうーとうぬ みーはがーとう	眼病の弟と
	じゅーさんいん やいびん	13人であるよ
	まじや	先ずは
	ゆんぐとうぬ しるしに	ユングトゥを唱えたしるしに
	うどうてい	踊って
	うみかきやびら	お目にかけましょう
神	女：でいきたー でいきたー	でかしたでかした

現在、演じられているムックジャに関わる儀礼について紹介したが、ムックジャの扮装や演技は、かつて（戦前までは毎年演じていたが、戦後は2度ばかり演じている）演じられていた状況とは異同がある。つまり、現在はだいぶ簡略化して演じているのである。かつての状況を紹介しながら、ムックジャの芸能史的意義について考察してみたい。

かつて、ムックジャを演じるのは2人であった。この2人を選出するのは神女である。選ばれた2人は女性で、うちひとりは男装、もうひとりは女装する。アサギマー（現在の区事務所前広場）に仮小屋をつくり、ムックジャに選ばれた2人は早朝からそこに閉じ込もる。小屋の中で、神女がムックジャに踊りとユングトゥの唱え方を教える。小屋の中での食事は栗飯のお握りでひとり2個。それはいったん御嶽の火の神に献饌してから持ってくる。夕方、アサギマーに紺地の琉球絣を着た婦人たちが集まってウシデークを踊る。そのころ、ムックジャは小屋の中で扮装をしている。ムックジャの扮装は、肩落とした芭蕉布の着物を着て、藁帯を荒々しくしめ、顔は芭蕉布の風呂敷で覆う。右肩先から青ミカンを入れた竹籠を掛け、右手で青竹の杖をつき、左手に青い葉のクバ扇を持つ。ムックジャの仕度が整ったころ、小屋の外でドラを1回打ち鳴らす。そのとき、ウシデークの踊りは止み、一同小屋に向かって合掌する。2度目のドラの合図で小屋の扉が静かに開けられ、3度目のドラの合図でムックジャが杖をつきながら、小屋から出てくる。ウシデークを踊っていた婦人や周りにいるムラ人たちは拍手をしてムックジャを迎える。三線、太鼓、ドラで囃子たてながら、ムックジャを神アサギ前に送り出し、婦人たちがウシデークを踊る。神アサギの前に青葉の仮小屋をつくってあり（扉なし）、その中にムシロを敷いて、シマンペーフとキンシルーという2人の男神人が正座している。ムックジャは男神人の前に来てぬかずき、両者で問答を交わす。これがユングトゥである。ムックジャの唱えが終

わると、男神人は「でいきたー でいきたー」（でかした、でかした）といって、クバ扇でムックジャの肩を叩き、喜びを表現する。ムックジャは神女に抱えられるようにして、婦人のウシデークの輪の中に入る。ムックジャは鼓と歌に合わせて不格好な踊りをする。いつの間にか2人は抱き合って尻を動かし、交接のさまを演じる。交接のさまを演じているとき、周囲から拍手がおこる。しばらくして、ムックジャ2人は暗闇のなかに消えていく。

ムックジャのかつての演技は、以上のようにあった。交接のさまを演じるので風紀上よろしくないということになり、戦後は2度ばかり演じて、その後は簡略化し、現在のような演じ方になっている。現在、女ムックジャを演じる婦人は、娘が嫁がおめでたの家の者である。ムックジャを演じると丈夫な赤ちゃんが授かるという。

さて、神女によって選出されたムックジャは、臨時にしつらえられた小屋に籠もる。芭蕉布の着物を着て、芭蕉布の風呂敷で顔を覆っていることは、人から神に化身したことを探している。現在は、タオル1枚で顔を覆うが、要は、顔を隠して自分が誰であるのかをわからなくすることが大事なのであって、自分を消し去ることで他者に化身し、神格化すると考えたのである。風呂敷やタオルは、もともとは植物で身を覆う慣習が、纖維が発展したことで布に変わった、と考えることができる。つまり、風呂敷やタオル等、布は蔓草や草木の延長で、それで顔を覆えば神靈が憑依するという民俗が継承されていたのである。ムックジャは杖に青竹を用いているが、竹も神靈が依り憑くといわれている。

そして、ムックジャは、国頭の先やって来たという。国頭の先とは、海上遙か彼方、つまり、ニライ・カナイを意味しているのであろう。海上遙か彼方からやって来て、五穀の豊かな稔りと子孫繁昌を約束する。また、ムックジャが演じた交接のさまは、生殖を暗示し、穀物の生産をうながそうとする模倣呪術、あるいは類感呪術である。

3. 川平の節祭のマウンガナシイ

八重山諸島の石垣市川平で、旧暦9月か10月の戊・戌の日から5日間行われるシティ（節祭り）に出現する＜マウンガナシイ＞という来訪神は、仮面はつけない。なお、石垣市字伊原間にはマウンガナシイの仮面が祀られている。

シティとは、節変わり、年変わり、年の折目を祝う祭りのことで、つまり、＜正月＞のことを意味している。農業暦の正月は、収穫祭を終えた後にやってくる。現在のように1月1日が正月となったのは後世のことである。だから、シティに出現するマウンガナシイは、海の遙か彼方からユー（世。家族の幸せや穀物の豊かな実り）と農耕の作法、牛馬の繁昌などをムラ人に授けるために来訪する神であるが、節（正月）に出現するのでく歳神＞である。

川平では、上のムラ（旧久場川村）と、下のムラ（旧内原村）にマウンガナシイが出現

する。ウヤ（親）とファー（子）の2神1組で、両村とも5組で編成される。上のムラは女神、下のムラは男神といわれている。

夕方、マユンガナシィに扮する青年（男子）は、緊張した面もちで、黒着物を着て、御膳に用意された食事をとった後、仏壇に線香を立てて合掌し、ムトゥ（元）の家に行く。そのとき、＜神＞に扮装する衣裳や道具を持っている。日没後、青年たちは集落から離れたくクラヌヤシキ＞という所定の聖なる場所へ行き、そこで、水甕の清水で口をすすぎ、塩を少々食して潔斎する。そして、身支度を整える。マユンガナシィの扮装は、クバ笠を被り、顔を手拭いで覆い、さらにクバの葉でつくった蓑を着て、腰にアンツク（編籠）を下げ、手に棒を持つ、というものである。上のムラは素足で、下のムラは草履を履く。また、上のムラは女神ということで、芭蕉の葉をカカン（下裳）として腰に巻く。

身支度を整えると、寅の方遙か彼方の神の国・ニーラスクに向かって呪文を唱え、＜神＞に変身する。この瞬間から神となった青年たちは、翌朝人間にもどるまで、ムラ人との会話は厳禁されている。マユンガナシィに扮するのは、原則として戌年生まれの青年層から20人が選ばれる。ムラ内の誰かが仮装し、神として出現てくる。ムラ人は、その神役の人が誰であるかということを知っていても、この神々を靈威あふれる神と信じているので、そのものをも真実神の化現とみなしている。このことは、仮面を被って出現する神の場合も同じ事情である。また、沖縄ではクバ（ビンロウ）は、植物のなかでもわけて神靈の依り憑きやすい、いわば神木であり、そのクバに身を包んでいる限り、その者はまさしく神そのものなのである。

午後8時ごろ、マユンガナシィは集落に出向く。集落うちの一軒一軒を訪れて、カンフチィという祝言を唱えて祝福する。カンフチィとは神口、つまり神のことばの意だが、神への祈願のことばの意もある。下のムラのカンフチィの一部を紹介しよう。

<唱え言>

うーとーどう
ういぬしいま
かんぬしいまーら
ふーゆー ぴいすゆーば
きたんまーでいん
んにまーでいん
んていちいきい
ちいんてい おーる
まーゆんがなしいでどう
しいさり とーどうっさり

<逐語訳>

ああ尊し
上の島
神の島から
大世、広世
桁までも
棟までも
満ちおき
積み満ちなさる
マユンガナシィと
申します、ああ尊し

家々で祝福を授けた神々は、寅の刻（午前4時）前には、再びクラヌヤシキに集まる。そこにティカサ（司。神女）や神役の男たちもやって来て、寅の刻になると、ティカサが寅の方位に向かって祈願する。神々は神衣裳を解いて、人間に戻ることをスディー（孵化、脱皮の意）といっている。

午前6時ごろ、ティカサを先頭に、〈オーパン家ヌ道歌〉を太鼓とドラに合わせて歌いながら、ムトゥの家に行く。ムトゥの庭で一同輪になって〈節ジラバ〉を歌う。歌い終わると座敷へあがり、祝宴となる。

II. 仮面神

仮面にはほとんどの場合、名前があり、造形的にも固定した顔をしている。見る側からすれば、目の前に現れる仮面が何ものであるかを認識できることを意味しているのである。仮面の顔のなかで、たとえば眼はまばたきをせず、そのことが仮面の神秘性や非日常性をあらわしているといってよいだろう。

さて、沖縄の仮面神には、獅子、彌勒、しょんだう、人形加那志、パーントゥ、アンガマ等がある。仮面を用いるが、神として扱う意識がほとんどないものに、鬼狂言の鬼（竹富島）、組踊「花壳の縁」の猿、フェーヌシマ等をあげることができる。ただ、フェーヌシマ系の芸能のなかでは、竹富町字小浜島のダートゥーダーは神格の要素を有しているのではないか、と思われる。

ここでは、神と意識されている仮面を取りあげてみたい。

1. 獅子

獅子は、中国からその信仰とともに伝來したと考えられる。獅子は百獸の王であるとか靈獸として考えられており、そういったことからその威力をあがめ、尊厳なるものと信じて、蹲距せしめたり、舞わせることによってあらゆる悪霊や災厄が祓われる、という信仰があると考えられる。

獅子には、石製や陶製の獅子像のように、呪術信仰のみに使用されるものと、芸能＝獅子舞に使用される木製のものがある。前者は、集落の出入口につけたり、屋根上や門中にかける仮面である。この種の獅子は重量があって、しかも目・鼻・口の穴が貫通していないかったりして、芸能に使用されることはない。

芸能に使用する獅子は、呪術信仰に用いられることがある。祭りのとき、ミチジュネー（お練り）の先頭を獅子舞が行き（道行獅子）、それが終わると芸能を演じる舞台の片隅（上手前や正面前）に獅子頭を置いて〈踊り神〉と称しているムラもある。

獅子舞は、沖縄本島と周辺離島では1頭で舞い、宮古諸島や八重山諸島では2頭（雌雄）で舞う。獅子頭は軽くて丈夫なデイゴを用いることが多い。上顎と下顎は奥の方で連結させて、口が開閉できるようになっている。胴体はショロ繩を編んで、これに芭蕉または麻の纖維をシャリンバイ（方言：テカチ）で褐色に染めて毛にする。脚も胴体と同じ作り方で、股まではけるようになっている。胴体の中には2人の者が入る。獅子舞の一般的な技法には、向こう突き出し、足打ち、大廻り、三角飛び、しらみ搔き、まり遊び等、そして噛む所作がある。噛む所作には、災厄や悪霊を噛み消すという点に重きをおいているからである、と考えられる。

2. 彌 勒

那覇市辻の二十日正月に登場する彌勒や那覇市首里赤田町の彌勒、大里村字古堅のミミンメーの彌勒はよく知られているが、地域的にみると、八重山諸島が彌勒の芸能は圧倒的に多い。八重山では、旧暦6月のプーリィ（収穫祭。豊年祭）、9月・10月のキティガン（結願祭）、シツィ（節祭）、竹富島ではタニドゥル（種子取祭）、波照間島では七月の盆ムシャーマに彌勒が登場する。幼児や婦人を引き連れて踊る。

竹富町鳩間島の彌勒は、豊年祭と結願祭に登場する。彌勒の面を被った者が左手に杖、右手に大きな団扇を持って先頭になり、下手から登場し、後ろに13人の婦人が眷属として続く。婦人の先頭2人は、神酒の入ったカンビン（酒器）を持ち、次の2人が五穀の入った籠を持ち、後の9人は黄色の三角旗を持つ。彌勒を中心にして婦人たちは円陣をつくり、左廻りに廻りながら踊る。彌勒の団扇の使い方は、常に、すくいあげるような所作でなければならない。この所作は、ユー＜世。富貴や豊穣などの意＞をすくいあげる意味だ、という。

ムラ人は、七福神の布袋に似た面を被った彌勒を、五穀豊穣をもたらす農耕の神と仰ぎ、彌勒の来訪によって島の繁栄が成就すると考えたのである。そして、穀物の実りや穀物に恵まれた豊かな生活を＜彌勒世＞＜彌勒世界報＞などといっている。

八重山民謡の「彌勒節」の歌詞の一部をみてみよう。

＜歌 詞＞

1. たいぐくぬ みるく
　　ばがしまに いもち
　　うかけぶせ みしょり
　　しいまぬ あるじ
　　サーンサーングーヤー
 - サーサーサー

＜逐語訳＞

- 大国の彌勒様が
　　我が島にいらっしゃっておりますから
　　統治を立派にしてください
　　島の主様
　　サーンサーングーヤー
 - サーサーサー

2. みるくゆや いもち	彌勒世は招来され
あしいばばん あしいび	遊ぶなら遊びなさい
ぶどうらばん ぶどうり	踊るなら踊りなさい
うゆるしでもぬ	お許しであるよ
サーンサーングーヤー	サーンサーングーヤー
サーサーサー	サーサーサー
3. みるくゆぬ しるし	彌勒世の兆候は
とうかぐしぬ ゆあみ	十日越しの夜雨
かきぶさいみしょり	お掛けください
しいまぬ あるじ	島の主様
サーンサーングーヤー	サーンサーングーヤー
サーサーサー	サーサーサー

竹富島の古謡のひとつで、旧暦8月8日の祭り「世迎え」で歌われる「トゥンチャーマ」(世迎えユンタ)は、次のような歌詞である。

<歌詞>

1. あがとーから くる ふにや
ぱがいぬ とうんちゃーま
ウヤキユーバ タボーラル
2. うはらから くる ふにや
なゆしちゃる くる ふに
ウヤキユーバ タボーラル
3. みるくゆば ぬしおーる
かんぬゆば ぬしおーる
ウヤキユーバ タボーラル
4. たきどうんに とうるすき
なかだていに とうるすき
ウヤキユーバ タボーラル
5. みるくゆば だぎうるし
かんぬゆば だぎうるし
ウヤキユーバ タボーラル
6. ややぬ ややぐとう
きぶるぬ きぶるぐとう
ウヤキユーバ タボーラル

<逐語訳>

- 遥か遠くからからやって来る船は
我が上の神の船
富貴な世を賜る (囃子)
- 大海原からやって来る船は
何を載せてくる船か
富貴な世を賜る (囃子)
- 彌勒世を載せて来られる
神の世を載せて来られる
富貴な世を賜る (囃子)
- 竹富島に取り付け
仲立島 (竹富島の異称) に取り付け
富貴な世を賜る (囃子)
- 彌勒世を抱き下ろし
神の世を抱き下ろし
富貴な世を賜る (囃子)
- 家の家ごとに
煙がたちのぼるごと (家ごと) に
富貴な世を賜る (囃子)

7. たーらゆば たぼーられ

俵世（俵の数が沢山収穫できる豊作な世）

を賜れ

ましぬゆば たぼーられ

枠の世（枠の数が沢山収穫できる豊作な世）を賜れ

ウヤキユーバ タボーラル

富貴な世を賜る（囃子）

彌勒の芸態や歌謡からして、弥勒は、常世国・ニライカナイから来訪すると人びとは考えているのである。元来、仏教で説く彌勒菩薩は、特に農耕と関係があるわけではないし、遙か彼方の海からやって来るともいっていない。しかし、現実には沖縄では、彌勒は海の遙か彼方から五穀の実りをたずさえて来訪する神と考えている。つまり、固有の常世神来訪の信仰の上に彌勒出世の信仰が重なったのである。本土では、彌勒踊りの伝承地が湘南や伊豆、房総など海岸地帯に集中しているが、彌勒信仰がわが国では、海辺における常世神信仰を背景にして育ったと考えられる。

また、鳩間島の彌勒の面は、豊年祭の朝、きれいに拭いて色を塗りかえる。島では、化粧するという表現を用いる。芸能を行う前に仮面に化粧をするのは、本土でも事例がある（たとえば、長野県新野の雪祭りの面や静岡県西浦の田楽の面など）。芸能を行う前に化粧することによって、面に新たな靈魂が入ると信じられている。

3. しょんだう

名護市屋部では、この踊りはスンドーと呼ばれ、旧暦8月に行われる「八月踊り」で踊られる。八月踊りのショーニチ（正日）に、芸能出演者全員によるミチジュネーがあるが、そのとき先頭と行列の末尾を行くのがスンドーである。行く先々を祓い清める役をする。道ジュネーの後、舞台公演となるが、スンドーはプログラムの最後に踊られる。

沖縄の古典舞踊で、一曲だけ仮面を使って踊るのがある。「しょんだう」である。美女2人と醜女2人で踊り、醜女が面をつける。内容は、美女2人が踊っているところへ仮面の醜女2人が登場し、醜女は美女につきまとうように踊る。醜女は美女の踊りを真似するが、醜女の踊りはぎこちない。美女は醜女といっしょに遊びたいが、いやな匂いがするので別々に遊びましょう、といって美女は退く。残された醜女は、美しいといってうぬぼれるな、この世は縁が大切だ、とやり返して退場する、というものである。美しさを誇る美女と、醜いゆえに相手にもされない醜女の哀感が交錯し、あふれるユーモアのなかにもペソスの漂う踊りに仕立ててある。

4. 人形加那志

名護市字久志にあるの仮面で、方言で<ミンジョーガナシ>という。久志の松浜家で保

管されている。旧暦7月16日に行われる豊年祭に〈踊り神〉として公開される。

豊年祭で、人形加那志の祈願をしてから、舞台の上手前方に置く。舞台で演じる芸能は、すべて下手から出るので、芸能はすべて踊り神・人形加那志にお見せする、奉納するするという形をとっている。人形加那志は、おしまいから2番目に踊る（おしまいは、舞方）。人形の面を被った者ひとりと、人形を誘導する二歳2人。出羽の「高離節」で、下手奥から登場し、舞台を一巡して中央に立つ。中踊の「仲村渠節」で二歳2人は退き、人形加那志が踊る。入羽も「高離節」が演唱され、二歳2人が再び登場して、人形加那志をいざなって下手奥に退場する。

5. パーツトゥ

パートトゥは、宮古諸島の平良市島尻と上野村野原で行われるパートトゥの行事に登場する。パートトゥとは、異様な形相をしたもの、鬼、妖怪という意味のようだが、ムラ人には〈神〉という意識がある。

島尻では旧暦9月に行事が行われ、青年男子の扮する3体のパートトゥが出現する。キャラーン（シイノキカズラ）で全身を覆い、シマリガーと称する古井泉に沈澱している泥を全身に塗る。面をつけ、後頭部にマーター（ススキの葉を十文字に結んだ呪具）を差し、杖を持つ。そして、シマリガーから出て、集落内を徘徊し、泥を人体や新築した家にぬって悪霊や災厄を祓う。

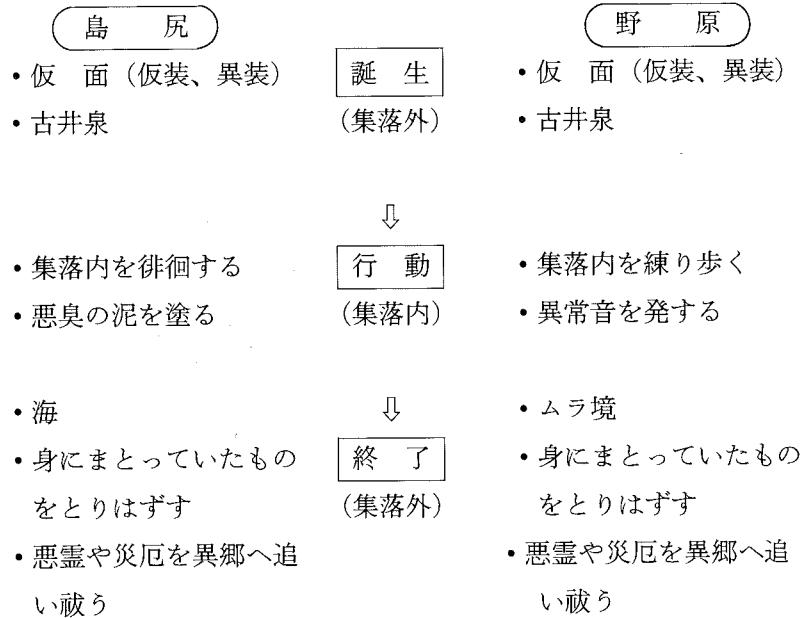
野原のパートトゥは、旧暦12月の丑の日に登場する。パートトゥは小学校高学年の男子が扮し、1体である。それにホラ貝吹き1人、太鼓打ち1人、婦人たちと子どもたちが加わる。パートトゥを先頭に、頭と腰にマーニ（クロツグ）を結わえ、ツザギー（ヤブニッケイ）の枝を持った婦人たちが続き集落内を練り歩いて悪霊や災厄を追い祓うのである。島尻と野原のパートトゥの比較をし、両者の異同をみてみよう。

	島 尻	野 原
行 事 名	サトゥプナハ（パートトゥプナハ）	サティパロウ
時 期	定期。毎年。プナハという行事が年に3回行われるが、3回目のプナハにパートトゥが登場する。行事は2日間。旧暦9月に行うスマッサリの行事の1週間から10日後に行う。	定期。毎年。旧暦12月最後の丑の日で、行事は1日のみ行う。
目 的	パートトゥが登場し、ムラ内の悪霊や災厄を祓って、ムラ人に健康や幸せを授け、ムラに恵みをもたらす。	同 左

	島 尻	野 原
参 加 者	ムラ人。パーントゥを演じるのは青年男子3人。2日間で6人。	ムラ人。パーントゥを演じるのは小学高学年の男子1人。パーントゥと行動をともにするのはホラ貝吹き1人、太鼓打ち1人、および婦人たちと子どもたち。
準備をする場所	ンマリガー（古井泉）とその周辺。	ニーマガー（古井泉）とその周辺。
パーントゥの数	3体。①ウヤパーントゥ（ンマパーントゥともいう）、②ナカパーント1体。ウ、③ッファパーントゥ。	
扮 装	キャーン（シイノキカズラ）を全身にまとい、ンマリガーに沈殿している泥を全身に塗る。仮面を被り、後頭部にマーター（サン。ススキの葉を十文字に結んだ呪具）を差し、泥を塗った杖を持つ。	パーントゥ役は仮面を被るだけで、服装は普段着のまま。パーントゥ以外の子どもたちも普段着。婦人たちには腰にマーニ（クロッグ）をつけ、それをタドゥナズ（センニングサ）で結わえて固定する。両手にツザギー（ヤブニッケイ）の枝を持つ。
行 動	ンマリガーにて誕生→フツムトゥ（拝所）→ウイサトゥ→アガズサトゥ→パイサトゥ→集落内を徘徊（新築した家、新生児の家に立ち寄る）→海に入り、身にまとっていたものを取り、面もはずす。	ニーマガーの側にて誕生→ウプウタキの側（遙拝）→集落内を2コースに分かれ、決められた道順を練り歩く（新築した家に立ち寄る）→ムスルンミー（集落西方のムラ境の場所）でパーントゥの面をとる。婦人は身にまとっていた草木を取り、所定の場所に置く。
行動する時間帯	昼間準備。日没前に行動を開始して日没後に終了する。以前は、日没後に行動を開始し、約3時間程集落内を徘徊する。	昼間準備。日没後に支度をして、行動を開始する。約1時間、集落内を練り歩く。
祓いの具体的な行動	ンマリガーに沈殿している悪臭の泥を、人体や家屋に塗る。	ホラ貝や太鼓の音。ツザギーの枝を打ち振る音。ホーイホーイやウルウルという婦人たちの掛け声と子どもたちのざわめき。
歌謡	なし。	なし。
伝 承	あり。往昔、島尻の北東のクバマと称する海岸に、クバの葉に包まれた不思議な仮面が漂着した。その仮面をムラの厄祓いに用いたところ効果があり、それ以後毎年使用するようになった、という。	あり。ムラ内からマズムン（妖怪）を追い祓うためにパーントゥの面を作って演じるようになった、というもの。他に4、5話あり。

島尻の伝承は、仮面がクバ（ビロウ）の葉に包まれて漂着したということだが、再三述べているように、クバは植物のなかでも神靈の憑依しやすいものであり、さらに、漂着したということは、仮面を神のよりましとする考えがあったからであろう。また、仮面を厄祓いに用いたら効果があったので、それ以後、祓いの行事で使用するようになったといふ。これは、精神的に安定な生活をするために、ムラ人は必要に応じて神を自分たちの側へ招いて定期的に拝みたいという願望があったからである。それゆえに、草装・仮面の神を出現させた。草装・仮面をすることによって人間より優越したもの、すなわち神になったのである。人は生きていくために神の威力が必要だが、神も人間世界へ来訪するには、人の手だてを必要としているのである。

■パントゥの祓いの構造



6. アンガマ

アンガマは、八重山諸島で、旧暦7月のソーロン（精霊。お盆）に、後生からやって来る祖先神といわれている。石垣市宇登野城では、13日迎え日の夜、アンガマの仮面をつけ、クバの扇を持ったウシュマイ（翁）とンミー（媼）が、タオルで顔を覆い、笠を被ってサングラスをかけて仮装した多数の青年男女を引き連れて家々を訪れる。ウシュマイとンミーは遠い先祖をあらわし、仮装した青年たちは近い先祖をあらわしているといわれる。主人の招きで座敷にあがり、「無藏念佛節」を歌い、翁と媼を中心にして、後生の問答が観客との間で交わされる。機知に富んだやりとりである。翁も媼も後生の人なので、問答はすべて裏声でなされる。問答のやりとりの途中で、引き連れてきた青年たちが踊り

を披露する。

アンガマの青年たちは、手拭いで顔を包み、それにサングラスをかけクバ笠を被っている。先祖の神がサングラスとは……と思うが、これも顔を隠して自分が誰であるのかわからなくするため、化身するためにやっていることなのである。

登野城の場合、ウシュマイとンミーおよび眷属たちは、かつては全員、竹の皮でにわかに作った（一説に、芭蕉の葉で作ったともいう）面を被っていたともいわれている。長年の伝承の過程で、ウシュマイとンミーにだけ仮面を被らせることになったのかも知れない。祖靈のより人間的な表現である。一方では、草装神から仮面神への移行と捉えることもできる。

■参考文献・資料

三隅治雄著『祭りと神々の世界』 NHK ブックス・カラー版、日本放送協会出版、

1979年。

沖縄タイムス編『おきなわの祭り』沖縄タイムス社刊、1991年。

拙論「シヌグ・ウンジャミ考」『民俗芸能』第60号所収、民俗芸能友の会刊1980年。

拙論「シヌグの芸能ームックジャを中心にして」『民俗芸能研究』第1号所収、民俗芸能学会刊、1985年。

拙論「宮古のパートトゥ」『文化課紀要』第5号所収、沖縄県教育庁文化課刊、1988年。



神衣裳を着て、頭に蔓草を被り、鼓を打って神歌をうたう神女たち。

(ウンジャミ。国頭村字比地)



神女の紙の髪飾りは草装が発展したものである。

(イザイホー。知念村字久高)



頭に木の葉を被り、手に枝葉を持って神歌・フサをうたう神女たち。

(ウヤガン。平良市字狩俣)



蓑・クバ笠・タオルで全身を覆い 6 尺棒を持って各家を訪問する歳神たち。

(マユンガナシイ。石垣市字川平)



仮面の者と草装の者が悪靈・災厄祓いをする。

(パーントゥ。上野村字野原)



舞踊の髪飾りも草装の発展したものである。

(八重山舞踊。石垣市)



仮面を被ったウシュマイ(翁)
とンミー(嫗)。盆に訪れる
祖靈神。眷属の青年たちも仮
装する。

(アンガマ。石垣市字登野城)



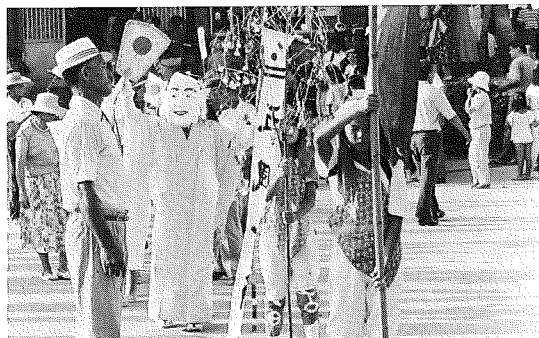
災厄祓いをする獅子舞と草装のムラ人
たち。

(二十日正月。城辺町字比嘉)



災厄祓いをする草装・仮面の神・パン
トゥ。悪臭のドロを塗って祓いをする。

(パントゥ。平良市字島尻)



仮面の来訪・彌勒の芸能。眷属をしたが
えて、祭りの場に登場する。

(ムシャーマ。竹富町字波照間)